

敦煌本アビダルマ文献の研究 — I —

A Study of the works of A-p'i-t'amo from Tun-huang

前田至成

1 はじめに

仏教僧団 (saṅgha) が当初の統一を失い、次第に多くの部派、学派に分裂しはじめると、仏陀の「教えの伝承」(āgama) と呼ばれた聖句は各学派独自の学的色彩をもって解釈が附せられ所謂、「アビダルマ」(abhidharma 阿毘達磨) と呼ばれる時代を迎えるのである。そして、このアビダルマ (dharma=法に対する考察及び研究) は次第に西北インドを中心に勢力を拡大し、各部派、各学派に属するところの学僧たちは厳しい戒律生活を守る中で、次々と自派の見解を明らかにしていった。われわれはこの各派が考究した宗教的、哲学的見解の集成を「阿毘達磨論書」(abhidharma-śāstra) と呼ぶ。仏陀入滅後およそ300~900年のことである。この部派、学派の数は北伝『異部宗輪論』及び、異訳二論によれば根本の上座、大衆2部の下に枝末18部を数え⁽¹⁾、南伝 '*Dīpavamśa*' では根本2部の下に枝末16部を上げ、更に、後代インド分裂6部、後代セイロン分裂3部の25部を数えている⁽²⁾。アビダルマの時代は教団統制の時代であり、各部派は教団内に独自の三蔵を持ち、戒律の厳守と教学、教理の発展に力を注いだのである。われわれが現存する abhidharma-śāstra を繙く時、一般的傾向として、アビダルマの人々が論究した学問は、仏陀の断片的聖句を当時のインド一般の考え方を中心に、世俗的解釈にたよりにつつ形成した学問であったといえよう。従って、その教学の多くが同一形式の論理と胎生学的解釈に終始する面のあることも否定出来ない。しかし、一面より見れば、アビダルマの人々が仏教をこのような世俗的解釈から再出発させたことによって、後の大乘仏教の如く、幅広い見解を以って人々に接し得たということも又、否定し得ない事実である。インド、チベット、中国等を通じて Abhidharma 学が僧伽必具の学として重視された事由もこの辺りに存するのではと私は考える。

ところで、インドにおけるアビダルマ学はチベットに至ると Chos mñon pa、又は Chos mnon pañi として受容され、中国では毘曇学、阿毘曇学として受容されている。チベット仏教と長安、洛陽を中心とした中原仏教が合流した地、甘粛省の敦煌仏教圏においても Chos mñon pa、又は阿毘達磨の語で受容されている。私はインドにおけるアビダルマ思想を研究していた昭和47年、京都大学人文科学研究所所蔵の敦煌文献 Pelliot 本マイクロフィルムを藤枝教授指導の下で閲読

する機会を得た。以来、Pelliot, Stein, Ol'denburg, 大谷探検隊将来の敦煌諸文献を調査し、敦煌仏教圏におけるアビダルマ思想の受容について研究を続けて来た。これまでの敦煌文献に関する研究は尨大な数に上るのであるが、敦煌仏典部門の研究のほとんどは大乘の経、律、論に係るものなのである。敦煌仏典に関するアビダルマ資料の研究が進まないのは、一にはアビダルマ教学は難解な学問とされる故に敦煌文献からの部派教学の抽出が困難であること。一には敦煌文献は断巻が多く完本が少ないこと。更に、仏教文献の全体数からするとアビダルマ資料の数が極端に少いことや、敦煌仏教に深い係りを持つ曇曠、法成、Kamalaśīla といった諸学僧の出生、所属学系などの履歴の全貌が未だ明らかにされるに至っていない等の点によるのである。

今、この小論において私が述べんとするところはアビダルマ資料としての敦煌出土大乘四法経群の研究である。大乘の四法に関するこの経論が、内容面よりして、多く小乗、即ち、アビダルマの性格をもって論ぜられていることに注目するのである。更に、この大乘四法経群に引用される『真実論』なる論書の持つ問題を考えてみたいと思う。仏教典籍中にその名を見ない『真実論』を‘*Abhidharmakośa*’の著者 Vasubandhu (世親, A. D. 400~480)と‘*Bhāvanākrama*’の著者 Ksmalaśīla (蓮華戒, A. D. 730~800)との係りにおいて考察しようとするのである。又、最後にこの『大乘四法経』の註釈疏である法成 (Chos grub, A. D. 833, 855~?)の『広釈開決記』なる一本が曇曠 (A. D. 763~?)の著書の『金剛般若経旨贊』の内容に直接影響を受けていることを明らかにしてみたいと考える。

2 アビダルマ資料としての四法経群

鳴沙山の東側に玉門系礫岩という地質を利用して1600年の歴史を持つ数多くの石窟群が並ぶ。修業僧、楽尊の弟子、法良により開かれたとされる世にいう敦煌石仏洞である。⁽³⁾

1907年イギリスの探検家 Mark Aurel Stein は道教の修行僧、王圓蘊が第344窟より古文書を発見したとの報を受け、以後三回の調査隊派遣で古写本、絵画、織繡など数万点を自国及び、統治下のインドに齊したのである⁽⁴⁾。1908年フランス人 Paul Pelliot はこの報を迪化(ウルムチ)で受け、助手の C. Nouette を伴い王道士と共に石室内で約6000~7000点を獲て自国へ運んだのである⁽⁵⁾。これら両国の情報が清朝学部へ伝えられたのは1909年のことで、翌年、残余の8500余点を北京に運搬させたのである⁽⁶⁾。1911年大谷探検隊は吉川小一郎を10月10日より二週間滞在させ、1912年1月橘瑞超と共に古写経及び、塑像600余点を購得した⁽⁷⁾。ロシアの Sergei Fyodorovich Ol'denburg は中央アジア学術探検に従事の際、二回目の調査中(1914~1915)に敦煌に赴き、数千点を自国に持ち帰ったのである⁽⁸⁾。1924年アメリカの Landon Warner は精美な壁画ばかり26点を剝り取り、塑像と共に自国へ持ち帰ったのである⁽⁹⁾。前後九回にわたって、異邦人たちの盗窟、購得に遭遇した莫高窟は悲運の遺蹟である。現在、莫高窟の在る敦煌県は中国領深く、甘粛省に属している。(緯度では北緯40度8分、東経94度4分に位置す

る。)石窟寺内部の保存については、ここ20年ばかり情報が得られなかったが、1975年作家の陳舜臣氏の報告によって、鳴沙山の横腹を掘って作られた莫高窟は無事に保存されていることが確認されている⁽¹⁰⁾。

このように鳴沙山莫高窟から発見された約4万点に及ぶ古写本は歴史、言語、宗教、文学、美術等の諸分野の研究に多くの問題を提示したのである。私はこれら敦煌出土の古写本の中からアビダルマ関係資料を抽出し、研究することに意を傾けて来た結果、Pelliot本のマイクロフィルムを閲読することによって、蒐集写本の中にアビダルマに深い係りを持つと思われる一群の經典類のあることに気付いたのである。

すでに敦煌本アビダルマ仏典としては大毘婆沙論(北京・露29)をはじめとして発智論見蘊(S. 6825)、俱舍論(北京・乃64,帝100,服77)、婆沙論の旧訳、阿毘曇毘婆沙(散661,907,1763,P. 2056)、阿毘曇心(S. 6559)などが散見されるが、これらアビダルマ文献はいつれも、中原仏教において玄奘(A.D.600~664)、僧伽提婆(A.D.385~389~?),浮陀跋摩(A.D.439~?)などの翻訳僧の手になったものをそのまま敦煌仏教圏に流入させたものである。ところが敦煌地域で独自の教学の形態を備えて研究されたアビダルマ文献が存在する。

薩婆多宗五事論(P. 2073, P. 2116) 丙寅五月十五日、於大蕃甘州張掖県訳 法成訳⁽¹¹⁾

阿毘達磨俱舍論実義疏(P. 3196) (Tib. *Chos mñonpa mdsod-kyi bsad-pahi rgyacher hgral-pa*) 安慧(*Blo-gros brtan-pa*) 造⁽¹²⁾

前者は大蕃国大徳三蔵法師の名を持つ呉の法成(Hgo Chos grub)が吐蕃の支配下にあった甘州で訳出したので「大蕃甘州」とある。上山氏の法成年代考⁽¹³⁾によれば、丙寅はA.D.846年となり、法成の第2期甘州時代に相当する。P. 2116の方は首尾を欠いた断簡であるが、P. 2073は完本であるところから首題があり「大蕃大徳三蔵法師沙門法成於甘州脩多寺道場」と記されており、尾題にいう「甘州張掖県」なる識語と併せ考えれば、アビダルマ文献に係るこの論書は、842年法成が『諸星母陀羅尼經』(S. 5010)を訳出し終えた4年後、同じ甘州の脩多羅(sūtra)訳出、書写の寺「脩多羅寺道場」において訳出したことがわかる。羽田亨氏は後漢安世高(~A.D.147, 180~)訳『阿毘曇五法行經』(大正, No. 1555)の異訳として法成が敦煌圏で訳出したものとされているが問題の多い一論である⁽¹⁴⁾。『大正新脩大蔵經』毘曇部3 (No. 1556)に収められている。

次に『阿毘達磨俱舍論実義疏』(大正29・325・a, No. 1561)は安慧(Sthiramati, Blo-gros brtan-pa)の筆になる一本である。伝えられるところによると⁽¹⁵⁾、彼は唯識、因明の学僧であり、南インド Lala (羅羅)国の出身で、生没年代は不明であるが徳光(Guṇaprabha, Yon-tan hod)論師と親しく唯識十大論師の一人と言われる。ペリオによってパリ国民図書館に移されたものであるが、チベット訳は全二帙の疏となっている。漢訳では俱舍論の全二章の内、界品・根品の前二章に相当する断簡しか残っていない。しかも俱舍論の本文と比較すると粗略な論たるをまめがれない。Samghabhadra衆賢(~A. D. 400~)の『順正理論』(大正, No. 1562)論駁の書といわれる安慧釈断巻であるが⁽¹⁶⁾、全体としては俱舍論本論のようなまとまりのある論疏ではない。

この P. 3196 について近年、龍谷大学図書館に韓国より将来された「大谷勝真ノート」⁽¹⁷⁾ 81頁では

- 第一巻 二紙 40.5×29 41.5×29
 第二巻・三巻 一紙 42×29
 第四巻・五巻 一紙 41.8×29
 第五巻 一紙 41.5×29 (単位はcmと考えられる。)

とあり「文字ハ良ナラズ 首部稍ニ損スルモ中部以下明瞭 唐末五代初マデノモノトス」との註によれば、この断簡の保存状態は良で、年代も吐蕃の跋扈 (A.D.755~763) が起って以降のもので、敦煌の吐蕃支配期に敦煌仏教圏に将らされたものと考えてよいであろう。

ところで、ここに前二論とは異った形態を持つ大乘経論がある。「大乘」とは名づけられているものの、内容的にはアビダルマの所説を依用したもので、著者も法成の名で知られる Hgo Chos grub と見做されている四法経論釈の一群である。下記の如く、この四法経に係る所の諸の註釈書を掲げて、先づその概要としよう。

1. 大乘四法経釈 S. 609 [G.5650(1)] 王.(斯)0609 大乘四法経釈一卷 世親菩薩造
 2. 大乘四法経釈 S. 3194 [G.5651] 王.(斯)3194₂ 大乘四法経一卷
 3. 大乘四法経論 P. 2350v^o₂ 王.(伯)2350₂ 卷背:2大乘四法経論一卷 世親菩薩造
 4. 大乘四法経釈 P. 2356v^o₂ 王.(伯)2356 卷背:2大乘四法経釈一卷 世親菩薩作
 5. 大乘四法経註解 P. 2461v^o₁ *Commentaire sur le* 大乘四法経 王.(伯)2461 卷背:2大乘四法経註解之一段 大正新脩大藏経(以下、大正) No. 2781 大乘四法経釈抄(題新加)
 6. 大乘四法経論 王.(季)0323 大乘四法経論一卷
 7. 大乘四法経論広釈 P. 2350v^o₃ 王.(伯)2350₂ 卷背:3大乘四法経論広釈一卷 尊者智威造
 8. 大乘四法経論広釈開決記 S. 216 [G.5648] 王.(斯)0216 大乘四法経論広釈開決記一卷
 9. 大乘四法経論及広釈開決記 S.2817 [G.5652] 王.(斯)2817 大乘四法経疏釈(擬) 大正 No. 15 35(題新加)
 10. 大乘四法経論及広釈開決記 P. 2794 王.(伯)2794 大乘四法経論及広釈開決記一卷(全)
 11. 大乘四法経論及広釈開決記 P. 3007 王.(伯)3007 大乘四法経論及広釈開決記
 12. 大乘四法経論及広釈開決記 王.(北京)官 42⁽¹⁸⁾
 13. 大乘四法経論及広釈開決記 王.(北京)結30
 14. 大乘四法経論及広釈開決記 (大乘四法経分門記) M. 1414
1. *Ārya-catur-dharmaka-vyākhyāna Vasubandhu* Poussin. 71
 2. *Ārya-catur-dharmaka-vyākhyāna Vasubandhu* Poussin. 72
 3. *Ārya-catur-dharmaka-vyākhyāna-tikā Paṇḍits Dānaśīla and Prajñāvarman* Poussin. 73
 4. *Ārya-catur-dharmaka-vyākhyāna Vasubandhu* Poussin. 74₂

5. *Ārya-catur-dharmaka-vyākhyāna-tikā Jñānadatta, Indian Pandit Dānaśīla* Poussin 74₃
6. *A commentary on the Catur-dharmaka-sūtra.* Poussin. 304
 S.……*Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhang in British Museum*
by L. Giles. (1957)
 P.……*Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang.* vol. 1 (1970)
 王.……王重民編「敦煌遺書總目牽引」(1942)
 Poussin.……Louis de la Vallée Poussin : *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-*
Hang in the India Office Library. (1962)
 M.……Л. Н. Меньшиков 編 ОПИСАНИЕ КИТАЙСКИХ РУКОПИСЕЙ ДУНЬХУАНСКОГО
 ФОНДА И. Н. А. (1963)⁽¹⁹⁾

以上が敦煌出土四法経群の蔵漢文献であるが、M. Lalou⁽²⁰⁾の文献には No. 618, No. 619 に四法経の名が見られるのみである。

この四法経群は敦煌時代以前に中原仏教に受容され、多くの註釈疏を残しているが、蔵外仏典を含めた「西藏大蔵経」にも Bkoḥ-hgyur (仏説部), Bstan-hgyur (論疏部) にわたって、四法経の関係文献を見出すことができる。

1. *Hṛphags-pa chos bsi-pahi rnam-par bsad-pa* Dbyig-gñen (Vasubandhu) 聖四法解説
 大谷. 5490
2. *Hṛphags-pa chos bshi-pahi rgya-cher bsad-pahi rgya-cher hḡrel-pa.* Ye-śes byin (Jñānadatta), Dānaśīla, Prajñāuarman, Ye-śes sde, 聖四法解説註疏 大谷. 5491
3. *Hṛphags-pa chos bshi-pahi rnam-parbsad-pa.* Ye-śes byin, Dānaśīla, prajñāuarma Ye-śes sde 聖, 四法解説 東北. 3990
 大谷.……西藏大蔵経—北京版, 大谷大学図書館蔵—(昭和37年)
 東北.……西藏大蔵経総目録—デルゲ版, 東北帝国大学蔵—(昭和45年)

これらの四法経論釈は共に Bstan-hgyur (論疏部) の中の Mdo-tshogs hḡrel-pa (諸経疏部) 又は Mdo-hḡrel (経疏部) に属するものである。

これらの中原及び、敦煌出土の四法経群を子細に考察してみると、菩薩が修行すべき四種の法を説き勧めることを内容とした四法経は明らかに大乘經典として出発したのであるが、後の註釈書に至って小乗、所謂、アビダルマの一大論師である *Vasubandhu* (世親) の名前が出ることによって (先述の S. 609, P. 2350 v^o₂, P. 2356 v^o₂, Poussin. 71, Poussin. 72, 大谷.5490 などは全て世親の著述に帰される。), この大乘教典は多くアビダルマ的色彩を強くして中国に受容されている。中でも敦煌仏教圏で形成された四法経の註釈は全くアビダルマ教学の延長線上にあると言っても過言ではない。既に拙稿でも述べた如く⁽²¹⁾, P. 2794では巻頭より世親の名を記している。

何故世親菩薩造而其論釈此經 (◦印筆者附)

と述べて造論所以を問ひ、明所宗の段では、

今此經者厥有菩薩名為世親位階加行造論積故是故当知唯識中觀宗之撰也
 と言ひ、世親に帰せしめることによって四法經の所在を明確ならしめようとしているのである。この P. 2794 は完全な写本であり、法成の著作であることがわかる。主題は「大乘四法經論及広積開決記 大蕃国大徳三蔵法師沙門法成集」と選号され、尾題には「癸丑年八月下旬九日、於沙州永康寺集畢記」との識語がある。即ち、上山氏のいう⁽²²⁾ 法成活躍期のうち最初期に属するもので、この開決記の後、833年10月には『六門陀羅尼經論并広積開決記』(P. 2165, P. 2256, P. 2861) が著わされ、更に、同年11月には『大乘稻芊經隨聽手鏡記』(P. 2284, S. 1080, P. 2303, P. 2328) が残されている。このように法成の仏典理解への第一歩が世親菩薩の著述を中心に行われたことは注目されなければならない。世親は唯識、中觀兩派の師であり、アビダルマ学派の大成者である。敦煌が吐蕃によって征覇され、法成がラッサ王朝の厚い信任を得て都統三蔵法師として敦煌仏教の再興を誓った時、法成には世親に直接する、唯識教学、中觀教学と共にアビダルマ教学の重要性を如何にして敦煌独自の仏典再生の中に注入すればよいかの思慮がめぐらされたことであろう。そして、彼の初期の著述である『大乘四法經論広積開決記』を著わすに当って、彼は原本たる『大乘四法經』すら実叉難陀、地婆訶羅の中原訳出のテキストを使用せず、敦煌仏教圏で独自に翻訳した『大乘四法經』(又は、『仏説菩薩修行四法經』S. 3194, P. 2350, P. 2356, P. 3919, 北京・雨55)のみをもとに特色あるアビダルマ四法を解説したのである。そこには世親が若き時、自国健陀羅国を離れ、鎖国の禁を犯してまで学問に燃える、その身を迦濕弥羅国に置いて、師悟入より4年間学んだアビダルマの集成たる『大毘婆沙論』の依用がなされているのである⁽²³⁾。法成の『広積開決記』五門料簡中、第一明造論所以の全て二四行は『大毘婆沙論』卷一をそのまま引用したものである⁽²⁴⁾。それは『大毘婆沙論』の「尊者」なる代名詞を全て「世親」の名に帰して改篇されるのである。

何故尊者造₂此論₁耶 答為饒益他₁故 謂彼尊者作₂是思惟₁

とある『大毘婆沙論』の文は法成『広積開決記』では

何故世親菩薩造而其論積此經耶答為饒益他故謂彼菩薩作是思惟

と改められている。この他、開決記に影響を与えているアビダルマ論疏は『俱舍論』本文の他『俱舍論光記』『俱舍論宝疏』『俱舍論頌疏』の諸疏⁽²⁵⁾がある他、有部のものと見られる『雜事律』や、次の章で問題とする『真實論』なる論書も二度引用されている。

如上、敦煌本に残るアビダルマ文献の照会を兼ねて、四法經群の問題点を提示してみたのである。

3 敦煌本開決記所引『真實論』の問題

如上、敦煌アビダルマ文献の主なるものを説きおえた。敦煌仏教に係る人物としては曇曠、

法成をその中心として『薩婆多宗五事論』『阿毘達磨俱舍論実義疏』『大乘四法経広釈開決記』といった特色ある論疏が訳出、又は著述されたのである。そこで、今、次にこれら敦煌アビダルマ文献の中で引用されているアビダルマの論書に言及してみたい。『大乘四法経広釈開決記』において引用された、『真実論』なる論書を先づ注目してみよう。法成の『開決記』に引用される経論の引用は直接、間接引用を含めて13種の経論にわたる。その中、主なものは直接引用として『対法集論』『雜事件』『莊嚴経論』『撰論』『仏地論』が各一回、『真実論』が二回、『瑜伽論』が三回、『智度論』が四回引用されている。この他、『中論』『広百論』『三十論』『十地論』と「仏地論及び諸釈」の経論の名と「外道世典」という表現も見られる。これらの引用経論の中で、今、問題とするのは『真実論』なる論書である。法成の『広釈開決記』では、先づ「釈経題」の科註でこれを引く

若し真実論ツツハハ説キナ有リ五義ニ 一は日ツ涌泉ト 二は称ス繩墨ト 三は名ツ結鬘ト 四は謂ヒ出生ト 五は号ス 顯示ト (P. 2794)

「経経」の義についての解釈のために『真実論』を引用したものである。更に法成は次の序文の「証信序」において破邪顕正を示して

言フ顕正ト者 真実論云フ 三宝最吉祥ナルガ 故我経初ニ説フ仏ヲ為ス 仏宝ト 我聞阿難及苾芻菩薩名ヲ為ス 僧宝ト 如是一時舍衛国等所説時処皆ヲ為ス 法宝ト (S. 216, P. 2794) —— 訓点筆者附 ——

と『真実論』を引用する。既に上山氏も指摘されているように⁽²⁶⁾ 法成が依用する経論が唯識系のものを主とするのは、彼以前に敦煌仏教を確立した曇曠がやはり唯識系の論師であったことによっていると思われる。それと共に私は曇曠、法成が唯識の知識以上にアビダルマの教学に深い関心を持っていたことを指摘しなければならないと考える。ここに法成によって引用される『真実論』が唯識系の論書でないことは明らかである。上山氏はこれを Harivarman (訶梨跋摩 A. D. 250~350) の『成実論』に帰せられたのである⁽²⁷⁾。その論拠は先に引いた『真実論』の二文中、後の一文は『成実論』巻1の文に符号するということである。そして、結論はこの『成実論』という論名の「成」は『広釈開決記』を著わした法成の「成」と同じ字であるが故に『広釈開決記』を書写したところの敦煌の学僧たちは、師法成を尊崇し、諱である「成」の字を以って「真」の字に置換したとされるのである。

われわれの注意を惹くものに『真実論』がある大蔵経中に『真実論』という題名は存在しない。しかし、右の文は明らかに『成実論』巻一末と符節を合するもので『真実論』ではなく『成実論』である。乃至、『成実論』の「成」の字が師の法成の諱であるため、弟子たちはそれを避けて『真実論』と呼びかえ、筆写したわけである。⁽²⁸⁾

と。大乘中観派にも関係のあるこの『成実論』ではあるが、Harivarman が Āśvaghoṣa (馬鳴 A. D. 150頃) を師としたならば多聞部、鶉胤部といった部派仏教に係るものであるから⁽²⁹⁾ 敦煌本『広釈開決記』で法成が部派仏教の論書『成実論』を引用していることには興味を惹かれるも

のがある。そこで、この『真実論』なる論書を課して『成実論』と断じてよいのかを問題としてみたい。先づ、次の二点から考察する。(一)、『成実論』の文が『広積開決記』とどのように符合するのか、又、符節を合しない点はどうか。(二)、『真実論』なる書は法成文献にのみ引用されるものか、他の敦煌文献にこの論書を見出しえないのかどうか。先づ、前者より考えてみよう。上山氏が言われる二文を上げよう。

言頭正者 真実論云 三_〇宝_〇最_〇吉_〇祥_〇故 我_〇經_〇初_〇說 (『大乘四法經論及広積開決記』S. 216, P. 27 94)

是故_〇應_〇礼_〇三_〇宝_〇以_〇最_〇吉_〇祥_〇故 我_〇經_〇初_〇說 (『成実論』1・印筆者附)⁽³⁰⁾

二論を比べると、先づ両論の説相の異なることが注目される。厳密にはペリオ本は『成実論』の「応」「礼」「以」の三字を欠く。又、『成実論』では「我經初說」で論文は終わっているので上山氏も『真実論』の後続の文について言及しておられないが、『真実論』の文は『大乘四法經』という聖典に対する法成の証信の序であり、「三宝最吉祥」から「皆為法宝」までを1文と考えなければならない。『成実論』1には「我經初說」以下に続文はない。従って『真実論』の引文は下記の如くなり、○印を附した部分のみが『成実論』と符節の合する部分となる。

三_〇宝_〇最_〇吉_〇祥_〇 故_〇我_〇經_〇初_〇說 仏_〇為_〇仏_〇宝_〇 我_〇聞_〇阿_〇難_〇及_〇苾_〇芻_〇菩_〇薩_〇名_〇為_〇僧_〇宝_〇 如_〇是_〇一_〇時_〇舍_〇衛_〇国_〇等_〇所_〇說_〇 時_〇処_〇皆_〇為_〇法_〇宝_〇

この『成実論』1末は「吉祥品」と名づけられているが、吉祥偈は『法句譬喻經』4⁽³¹⁾、『増一阿含經』⁽³²⁾ 12、『瑜伽師地論』22⁽³³⁾などに類文を見るものである。『法苑珠林』19⁽³⁴⁾には「故成論云。三宝最吉祥。故我經置。」として『成唯識論』からの引文の如く説いているが、これは『成唯識論述記』1本⁽³⁵⁾に

故成実論説。言三宝最吉祥故。我經初說。

とある文に拠ったのであろう。唯識の師たる法成は『真実論』なる新書を理解するためにこれらの論疏に注目したであろうことは充分考えられよう。又、後に述べるけれども、『真実論』のこの文が「破邪顯正」という外道破斥の段で引かれていることを注意しておきたい。

次に『真実論』の他の一文について検討してみよう。この文は「經經」即ち, sutra に対する解釈である。『成実論』にはこの文を見出せない。このことは『真実論』を『成実論』であるとする論拠の薄いことを示している。『雜阿毘曇心論』8には⁽³⁶⁾

修多羅者 凡有五義 一曰出生 乃至 二曰泉涌乃至 三曰顯示 四曰繩墨 五曰結鬘

とある。『真実論』の涌泉, 繩墨, 結鬘, 出生, 顯示とはほぼ同名である。修多羅五義を説く經疏としては『觀無量壽經疏』⁽³⁷⁾の「故云。修多羅以五義与義訓釈。」等が知られるが、修多羅七義は『大品遊意』⁽³⁸⁾に

善見律毘婆娑中。阿難以七義。明修多羅。一発。二善語。三秀出。四經強。五誦泉。六繩墨七經也 乃至 阿毘曇以五義弁之。一云出生。二顯示。三涌泉。四繩墨。五結墨。

と詳述されている。次に『仁王般若經疏』に注目すると『雜心論』に經義を求めている。即ち

雑心論中五義釈経。謂涌泉等⁽³⁹⁾。

という。ここにいう『雑心論』とは先の『雑阿毘曇心論』のことと考えられるが、修多羅五義の順序が『真実論』の如く「涌泉」から始まっているように窺われる。修多羅五義が多くアビダルマ所説であり、これを法成は『真実論』の所論として改篇した上で引用しているのである。法成は『広釈開決記』の中でアビダルマの集成書『大毘婆沙論』⁽⁴⁰⁾の一文を部分的に改作した上、転用するなどの点が窺われるところより見れば、この修多羅五義も法成による同様の操作と考えてよいであろう。いづれにせよ、法成は『仁王般若経疏』などを媒介としてアビダルマ思想を『広釈開決記』に織りこみ、アビダルマ論師たる世親の教説を解説しようと考えたものと思われる。そして『真実論』なる論書もアビダルマ的性格を持つ論書として法成によって依用されていると考えられる。如上、上山氏の仮説たる「真実論とは成実論なり。」との立論には再検討が必要であるとの結論に至るのである。では次の第二点について考えてみよう。『真実論』なる論書は法成の敦煌資料だけに見出されるのであろうか。私は昭和48年より『大正新脩大藏経』85（古逸部）所収の敦煌残巻、龍谷大学図書館所蔵大谷探検隊将来敦煌文献、曇曠資料の整理をはじめたところ、『真実論』に関する文献を見出すことが出来た。而も、これらの文献に見られる内容は『真実論』なる書の伝播史を法成より以前に遡って考えなければならないことを示唆している点で注目されるものである。龍谷大学図書館に所蔵される大谷探検隊将来の敦煌文献の中に『維摩経疏』なる断簡がある⁽⁴¹⁾。そこには

問仏有十号何故経初唯举仏号答 依真実論仏具十義所以偏与言十義者 一覚勝天鼓 天鼓有と『真実論』を引用して「仏十号」を説いている。この『真実論』の文は法成の『四法経広釈開決記』の二文とは別のものである。ところが、この新しい一文について青龍寺良賁には詳しい見解の存することがわかった。良賁の『仁王護国般若波羅密多経疏』上巻がそれである⁽⁴²⁾。

真実論云。大師十号経初何故不列余九。而独称仏。有十義故。一覚勝天鼓。二不由他悟。三離二無知。四已過睡眠。五譬如蓮華。六自性無染。七具足三義。一假名仏即六神通。二寂靜仏惑不生故。三真実仏即是真如。八具三徳。摩訶般若。解脫。法身。九具三実性。十自知令他知。仏具十義。余名不爾。故諸経首皆称仏

この疏で『真実論』を引いた良賁（A.D.717～777）は唯識の学匠としては窺基系統の色彩の強い道氈（A.D.668～740）の影響を受け又、法相宗西明寺系統（円測 A.D.613～696）の強い曇曠（～A.D.763・774～）の影響も受けた人物であろうと考えられている。道賁が敦煌仏教圏で活躍した曇曠と人格的接触を持ったとすれば、年代的に近い良賁と曇曠との係りは道賁以上に深いものがあつたことは推測に難くない⁽⁴³⁾。事実、道賁の著述の中にこの『真実論』を見出すことは出来なかつたけれども、曇曠の『金剛般若経旨賛』（S. 2744, S. 2782）では法成文献で見た『真実論』の二文がそのまま引用されているのである。『金剛般若経旨賛』上に⁽⁴⁴⁾

若真実論。説有五義。一曰涌泉。二称繩墨。三名結鬘。四謂出世。五号顯示。若准此方。経者常也。法也。逕也。

とあるのが法成の修多羅五義である。更に、

言顯正者。真實論云。三宝最吉祥故。我經初説仏為仏宝。我聞阿難及比丘衆。名為僧宝。如是
 是一時舍衛国等。所説時処。皆為法宝⁽⁴⁵⁾。

とあるが三宝吉祥の文である。法成が引用した『真實論』は良貞、曇曠の活躍した西域各地で
 流布していることが明瞭となったのである。少くともこの『真實論』は曇曠が『金剛般若經旨
 贊』を著わした西明寺や、良貞が係りを持っていた青龍寺などでは経釈に依用されていたに相
 違ない。又、ここには紙数の関係で割愛せざるを得なくなったが、曇曠の著『金剛般若經旨贊』
 が法成の『大乘四法經論及広釈開決記』にそのまま依用されている事実を私は見出したので
 ある⁽⁴⁶⁾。両書の密なる関係については後日、これを論じたいと思う。

では敦煌地方を中心に流布した『真實論』とは如何なる論書であろうか。『真實論』が引か
 れた『広釈開決記』はアビダルマの性格を持つ論疏であり、世親というアビダルマ論師の所説
 として出発させている疏である。又、引用諸論においても性相学的論書が多い。そこで世親に
 帰された著作の中に『真實論』に相当する著作はないであろうか。中原仏教において伝訳されな
 かった未渡經典(中原において梵文のまま放置され、訳出経論に数えられなかった仏典を含む。)を
 調査してみると、普光(生没年不明)の『俱舎論記』⁽⁴⁷⁾に、

正理論師以_テ世親論主造_ル勝義諦論_ニ中叙用。増家_ニ破遂不_レ認_ル此解_ニ。

と世親に『勝義諦論』なる論書のあったことを語っている。この『勝義諦論』は玄奘(A.D.600~6
 64)の『西域記』4⁽⁴⁸⁾にもその名を見る。勝義諦論とは梵名では‘*Paramārthatika*’である。
 『婆須樂頭法師伝』⁽⁴⁹⁾の伝説では世親は外道を破斥する目的で『七十真實論』を著わしたとい
 う。『七十真實論』とは梵名では‘*Paramārthasaptatika*’である。敦煌仏教圏へも大きな影響を
 与えたと言われる Kamalaśīla が Śāntarakṣita (寂護 A.D. 680~740) の ‘*Tattvasaṅgraha*’ を註
 釈した論書には『七十真實論』を次のように説いている⁽⁵⁰⁾。“*kośa-paramārthasaptikāiṣa*”
 と論の名前だけを出している。唐代定賢の『四分律疏飾宗義記』7末では世親論主に『勝義
 七十論』のあったことを説いている⁽⁵¹⁾。

世親菩薩出世時造勝義七十論広破彼宗

と。以上を総合してみるとKamalaśīlaの説く‘*Paramārthasaptatika*’定賢の『勝義七十論』、
 玄奘、普光の言う『勝義諦論』も共に *Paramārthatika* 即ち、真實論と考えてよい。而し
 て、敦煌を中心に法成、曇曠、良貞等が引用した『真實論』とは世親のこのような著書であ
 ったのではないだろうか。敦煌出土の四法經論の一釈疏の中でアビダルマが重視され、『娑沙
 論』の四法契經説の受容と共に、世親に帰せられる『真實論』によって『大乘四法經論』が広
 釈されたと理解しても必ずしも誤りとは言えないであろう。

4 むすび

以上、敦煌仏教におけるアビダルマ文献の問題点を述べて来た。A.D.781年敦煌は吐蕃によっ

て陥落したが、既に A.D. 755年頃には安史の乱を契機として吐蕃の跋扈が行われており、青龍寺道氐をはじめとする諸僧は西に逃れて沙州に至り、吐蕃の贊普 Khri-sron-lde-btsan (~ A. D. 756~797) チソン・デツェンは曇曠を下問して仏教要義二十二問を返答せしめている。道氐は青龍寺に於いて『御注金剛般若波羅密多宣演』を著わし、乗恩は涼州で『百法論疏』『百法論鈔』を著述している。良貞も又、『仁王般若經疏』を著わしたのである。中でも、窺基、円測、道氐、法蔵といった高僧の所説を吸収した曇曠の仏教学が法成にうけ継がれた意義は大きい、法成文献に見られる諸説混在の傾向は恐らく曇曠の影響を受けたものと考えてよいであろう。敦煌出土の仏典研究が更に進めば敦煌仏教を形成した学僧たちの受容した教学形態は序々に明らかにされるであろう。法成の手になる著作の一、二に於いて既にアビダルマ思想への積極的アプローチがなされていることを考えれば、将来敦煌出土文献に占めるアビダルマ諸論の影響は大きいものがあると思われる。Kamalaśīla が敦煌仏教に係ることになったのも 小乗及び、外道の教学の敦煌仏教への影響としては注目すべきである。既に、法成は自著において Kamalaśīla なる学者の稲苧経の *Tika* を敦煌で依用しているし、上山氏の説では当時敦煌では可成りの数にのぼる Kamalaśīla のものが流布していたともされている⁽⁵²⁾。『真実論』なる論書もチベット仏教との係りに関して敦煌圏に採来されたという可能性も検討されてよい。又、敦煌仏教の今後の問題は中原仏教との交流史、就中、敦煌学僧と唯識諸師との係りの中に明らかにされるとと思われる。慈恩寺、西明寺、青龍寺などに於ける学問形態を考察することが特に大切である。今、この小論において述べて来た所はアビダルマ資料の紹介と、引用経論の問題であった。今後、更に敦煌資料の中に散見するアビダルマ文献としての『律文雜抄』などの律蔵資料や『諸論雜抄』といった論蔵雜部の研究を続けて行きたい。

(1976・9・30)

註

- (1) 『異部宗輪論』(大正49・15・a~b)
- (2) 'Dīpaṃśā' V. 39-54.
- (3) 潘黎茲「敦煌的故事」北京(1956), 寺岡龍舎「敦煌本郭象注莊子南華真經研究總論」福井漢文学会(1966), 端己「敦煌千仏洞」上海(1954), 蘇瑩輝「敦煌論集」台湾(1969)
- (4) 梵語関係はインド省図書館, 漢文関係は大英博物館, 西藏関係は大英インド局に所蔵。
- (5) 文献は国立図書館, 美術品は Musée Guimet に収蔵。
- (6) その後発見の1500余点と共に国立北京図書館に収蔵。
- (7) 大谷探検隊将来のものは一度日本へ運ばれたが、一部を残して余は大連図書館, 京城図書館へ移管された。龍谷大学図書館所蔵。
- (8) 約1万点が Leningrad のソビエト聯邦科学院アジア民族研究所に収蔵。
- (9) L. Warner は今次大戦で奈良・京都を爆撃から救った博士であるが1925年にも、再び莫高窟に来ている。しかし現地人の反対に会い蒐集を断念した。L. Warner については陳舜臣「敦煌の旅」平凡社(1976)を参照。
- (10) 『薩婆多宗五事論』については羽田亨・ペリオ集「敦煌遺書」活字本(1926)に詳述。

敦煌本アビダルマ文献の研究

- (12) Tib : *Chos mñonpa mdsod-kyi bsad-pahi rgyacher hgrel-pa* はデルゲ版にはなく北京版 vol. 147 (324策), 大谷. No. 5875 に訳者 Dharmapālabhadra として所収。
- (13) 上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」上, p. 152 (東方学報 38, 1967)
- (14) 羽田亨・ペリオ集「敦煌遺書」活字本 (1926)
- (15) 『成唯識論』1本は徳光を安慧の師とし, 『ターラナータ仏教史』(Tāranātha) では 徳光を安慧の弟子としている。
- (16) Yaśomitra, “*Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*” part I ed. Wogihara (1971)
- (17) 「大谷勝真ノート」は韓国にあったものが1972年龍谷大学訪韓団によって将来されたペリオ本の実見記録である。
- (18) 釈疏を除いた『大乘四法経』群については, 拙稿「敦煌本法四経論広釈のアビダルマの性格」(日本印度学仏教学研究22/1, 1973) を参照されたい。
- (19) Меньшиков の No. 1414 は敦煌出土の四法経群では系統を異にする一本である。私はレニングラードにあるこの敦煌本の写本を1973年に学術交流で当地を訪問された 福井大学教授寺岡龍含博士に依頼して入手した。拙稿「敦煌本四法経論釈一異本の系譜—メンシコフ1414番—」(日本印度学仏教学研究23/2, 1975)
- (20) Lalou : *Inventaire des Manuscrits tibétains de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale. (Fonds Pellio tibétain, n°s 1-849.)* Tome 1. Paris (1939)
- (21) 拙稿「敦煌本四法経論広釈のアビダルマの性格」(日本印度学仏教学研究22/1, 1973)
- (22) 上山大峻「前掲書」p. 152
- (23) 世親については, 真諦『婆須槃頭法師伝』(大正 50・190・a) の他に, E. Frauwallner : *On the date of the Buddhist Master of the Law Vasubandhu*, Serie Orientale Roma III. (1951), 干潟龍祥「世親年代考」(宮本正尊教授還暦記念論文集; 1954) 等を参照されるとよい。
- (24) 拙稿「前掲書」(日本印度学仏教学研究22/1)
- (25) 『広釈開決記』と諸論疏の係りは, 『俱舎論』では声根・声境・耳識との関係, 『頌疏』では科段区分, 『宝疏』『光記』では序分中の相説の類似などにも見られる。
- (26) 上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究」下, p. 177. (東方学報 39, 1968), 同「曇曠と敦煌の仏教学」(東方学報 35, 1964)
- (27) 上山大峻「先掲書」p. 191 (東方学報 39)
- (28) 上山大峻「先掲書」p. 191 (東方学報 39)
- (29) 福原亮徹「成実論の研究」p. 52 (永田文昌堂, 1969)
- (30) 『成実論』1 (大正 32・247・b)
- (31) 『法句譬喻経』4 (大正 4・608・c)
- (32) 『増一阿含経』12 (大正 2・601・c)
- (33) 『瑜伽師地論』22 (大正30・401・c)
- (34) 『法苑珠林』19 (大正 53・426・c)
- (35) 『成唯識論述記』1・本 (大正 43・233・a)

敦煌本アビダルマ文献の研究

- (36) 『雑阿毘曇心論』 8 (大正 28・931・c)
- (37) 『觀無量壽經疏』 (大正 37・283・a)
- (38) 『大品遊意』 (大正 33・65・c)
- (39) 『仁王般若經疏』 (大正 33・435・a)
- (40) 『大毘婆沙論』 1 (大正 27・2・a)
- (41) 「西域文化研究」 (1963) 龍谷大学図書館所蔵大谷探検隊将来敦煌古写本
- (42) 『仁王護国般若波羅密多經疏』 上 (大正 33・429・a)
- (43) 『敦煌と中原との唯識交流については平井有慶「敦煌本・道氤集『御注金剛經宣演』考」(日本印度学仏教学研究22ノ1, 1973), 同「敦煌本・道氤集『宣演』と曇曠撰『旨贊』」(日本印度学仏教学研究23ノ2, 1975)
- (44) 『金剛般若經旨贊』 上 (S. 2744, S. 2782, 大正 85・69・a)
- (45) 『金剛般若經旨贊』 上 (大正 85・69・c)
- (46) 『広釈開決記』と『金剛般若經旨贊』とが附節合する部分は『金剛般若經旨贊』かと言えば、卷上 (大正85・69・a) より同卷 (大正 85・71・b) に及ぶ。
- (47) 『俱舍論記』 (大正 41・71・c)
- (48) 『西域記』 4 (大正 51・889・b)
- (49) 『婆須槃頭法師伝』 (大正 50・190・a)
- (50) E. Krishnamacharya ; *Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the commentary of Kamalāsīla*. vol. 1 p. 129 (1926)
- (51) 『四分律疏飾宗義記』 7・末 (正統 1・66・223 左 b)
- (52) 上山大峻「先掲書」 p. 148 (東方学報39, 1968)